

UP 選書

# 日本の農業

大内 力

金沢夏樹 編

福武 直



UP選書

# 日本の農業

大内 力  
金沢夏樹 編  
福武 直

東京大学出版会

日本の農業



UP 選書 43

1970年 3月 30日 初 版

1981年 4月 20日 第11刷

[検印廃止]

編著者 おおうち つとむ  
大内 力  
かなざわなつ き  
金沢夏樹◎  
ふくたけ ただし  
福武 直

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 江村 稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 研究社印刷株式会社

製本所 新栄社製本所

1361-05430-5149

## は し が き

日本の経済は、戦争直後の復興期を経て、昭和三十年前後から成長に転じた。そして、最近十年ほどの間に驚異的な発展をとげ、国民総生産世界第三位という地位をしめるまでに至った。それは、日本の産業が全体としていちじるしく発達したということにはかならないが、その急激な高度成長のなかで、農業は、他産業ほどの発展をとげることができず、つねに立ちおくれに苦しみながらも、大きく変化せざるをえなかった。

日本経済の高度成長は、その速度が急速であっただけに、社会の多くの面にひずみをもたらしたが、農村の社会は、農業の立ちおくれと相俟って、とくに大きなひずみに悩まなければならなかった。日本経済全体の成長過程のなかで、農業と農村はいちじるしい変貌を強いられながら、苦悶してきたといつてよいであろう。この苦悶のなかから、日本の農業と農村は、どのような道をたどるのであるか。数年前からの基本法農政も、構造改善のかけ声だけにおわり、農業の基本問題を解決することはできなかった。昨年来提唱されている総合農政も、いわゆる農業の近代化を達成するにはたりないように思われる。日本農業の進路は、今なお見きざめられてはいないといわなければならない。

この書物は、このような状況のなかにある日本の農業と農村の諸問題を、経済と経営と社会という三つ

の側面から解明しようとしたものである。

私たちのこの書物の最初の出発点は、日本経済が成長に転じ始めたころの昭和三十二年の一年間に、大内・金沢・福武の三人が『農業朝日』に分担執筆したことに発する。それは、日本の農業と農村の問題点を図解しながら明らかにしようとしたものであったが、その原稿に若干の増補が施されて、翌三十三年に『日本農業の基礎知識』という小著が誕生した。その共著は、農村の青年諸君に読んでもらいたいという願いをこめて出版されたが、はたしてどれほど農村に読者を見出すことができたであろうか。それは、意外にも大学初級のテキストなどにも使われて版を重ねたが、その後の農業の変化は、長く版を重ねつづけることを許さなくなった。

そのため、私たちは、できるだけ図解を入れるという最初からの意図を残しながら、もっと詳しい説明を加えることにして、全く書き改めようとした。そして、私たち三人だけでなく、何人かの協力者を求めて、取りあつかう問題もひろげ、書名も『日本の農業』という簡潔な題に改めて出版した。昭和三十九年のことである。

しかし、この書物も、当時就業人口の三割以上であった農業人口が二割以下になるといふいちじるしい変動のなかで古くなってしまった。基本法農政が動き出したところに書かれた書物は、総合農政という看板がかかげられるようになった現在、再び書き直されなければならなくなったというわけである。こうして私たちは、このたびも、編者三人のほかに、斎藤仁・佐伯尚美・児玉賀典・小野誠志・高橋正郎・松原治

郎・蓮見音彦の諸君に分担執筆を求めた。

その結果生まれた新版の『日本の農業』は、旧版よりもデータが新しくなっただけでなく、その構成も現状に即して改められた。この書物がこれまで、かなり多くの読者によまれて版を重ねてきたのは、図解によって理解しやすくしようと努めたことと、日本農業をめぐる諸問題がひとつの本の中で農業経済・農業経営・農村社会の三つの面から明らかにされるという便利さによると考えられるが、その長所は、この新版においても旧版同様に生かされている。

私は、この新しい『日本の農業』が、もとの本と同じように、農業の前進のために働いている関係者だけでなく、苦悶の中から日本農業の新しい道を主体的に切り開こうとしている若い農業者にも読まれてほしいと思う。そして、この書物が、日本農業の今後の発展のためのエネルギーをひき出す一助にもなれどと願ってやまない。

最後に、私は、編者のひとりとして、専門的な学術論文を書くよりもある意味では苦勞の多い仕事をひきうけてくれた前記協力者の諸君に、大内・金沢の両君とともに心からお礼を申しあげたい。また、この新版の刊行のためにいろいろと手数を煩わした東京大学出版会の石井和夫・大江治一郎の両君にも謝意を表しておきたいと思う。

昭和四十五年二月二十一日

福 武 直

日  
本  
の  
農  
業  
目  
次

はしがき

# 序説 日本農業のすがた・・・・・・・・・・・・・・・・一

—— 国民経済と農業 ——

## I 農業の経済

|     |            |       |    |
|-----|------------|-------|----|
| 第一章 | 農家人口と農業労働力 | ..... | 七  |
| 第二章 | 米          | ..... | 三  |
| 第三章 | 成長作物と関連産業  | ..... | 六  |
| 第四章 | 農業協同組合     | ..... | 八  |
| 第五章 | 国際的関連      | ..... | 一〇 |
| 第六章 | 国家と農業      | ..... | 二三 |

## II 農業の経営

|     |              |       |    |
|-----|--------------|-------|----|
| 第一章 | 農業経営のしくみ     | ..... | 一三 |
| 第二章 | 経営規模拡大の意義と方法 | ..... | 一四 |

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| 第三章 | 稻作経営と水田    | 二五 |
| 第四章 | 酪農の今日と将来   | 二六 |
| 第五章 | マーケティング    | 二七 |
| 第六章 | 農業生産の集団と組織 | 二八 |

### III 農村の社会

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| 第一章 | 変貌する農村     | 二七 |
| 第二章 | 家族生活の現状と将来 | 二五 |
| 第三章 | 部落と諸集団     | 二九 |
| 第四章 | 地域開発と農村    | 二五 |
| 第五章 | 過疎問題       | 二八 |
| 第六章 | 農民意識の変化と停滞 | 二九 |
| 第七章 | 政治構造と農民    | 三〇 |
| 結び  | 日本農業の進路    | 三九 |

序説

日本農業のすがた

—— 国民経済と農業 ——

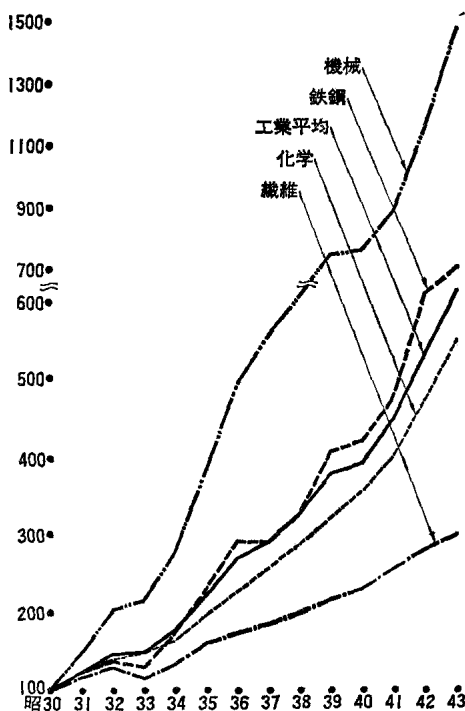


## 1 はじめに

昭和三十年以来日本経済がめざましい高度成長をとげてきたことはだれでも知っているが、それはたんに日本の経済が量的に大きくなったというだけのことではなく、経済の各分野に大きな変化がおこったことをいみしている。工業では新しい技術がつつぎとりいれられて、大幅な技術革新がすすんだばかりでなく、石油化学や電子工業のような新しい分野の開拓がすすんだ。それとともに、鉄鋼・機械・造船・化学など重化学工業の発達がとくにめだつようになり、それまで繊維や雑貨など軽工業を中心としていた日本の工業は、いまや完全に重化学工業中心の、先進国型に変わってしまった。またそのなかで、とくに大企業の成長はめざましく、いまでは世界的な大企業が日本にもいくつかみられるようになった。たとえば一九六八年の売上高の順位でみると、アメリカをのぞく世界の一〇〇の大工業会社のうちには、日本の企業は一八社もはいつており、そのうち日立製作所が一〇位、三菱重工が一七位、松下が二二位、トヨタが二三位にくいこんでいる。第1図をみれば、この間、日本の工業がどんな変化をとげながら成長してきたかがおよそうかがえるだろう。

もちろんこうした変化は工業のみに生じたものではない。運輸・商業・サービス業などもいちじるしく成長したし、多かれすくなかれ大規模化された。またこうしたなかで、雇用もいちじるしくふえたとし、国民所得も増大した（のちの第12図をみよ）。それがまた国民の生活様式をも大きく変えていたのであり、消

第1図 工業生産指数 (昭和30年=100)



うと、他方でフーテンとかゲバ学生横行があるというのも、これとけっして無関係ではないのである。

このような日本経済の変化は農村にも大きな影響をおよぼした。こんにちの日本の農村はもはや十五年まえの農村ではない。もちろん変化したといえば、日本の農村にしても、明治維新このかたたえず変化してきたにはちがいない。ことにこの戦後は、農地改革の影響もあって、農村も大幅に変わったことはたしかである。しかし、それにもかかわらず、都市にくらべれば農村の変化は比較的小さく、工業にくらべ

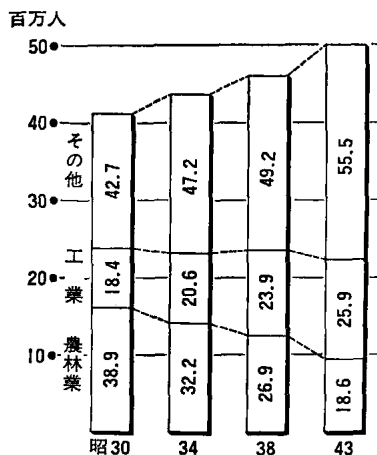
費水準の上昇、生活様式の西欧化の進展も、目を見張るようなものがあつたことは周知であろう。テレビや電気冷蔵庫の普及からはじまって、マイ・カー族の横行、消費者革命、レジャー・ブーム等々と数えあげただけでもそれは明らかである。そしてそれは、国民のものの考え方でそうとう変えているのであり、一方で泰平ムードとか女性化時代とかがあるかと思

ば農業の変化はずっと小さかった。だから十五年まえであれば、旧態いぜんたる農村といってもそんなにおかしくはなかったし、すくなくとも目につくような変化はそうなかった。だが、ここ十五年は、農村も大変な変わりかたである。おそらく、こんなはげしい、いわば革命的な変化をうけたことは、日本の農村の歴史のうえでいっても、そうたびたびあったことではないであろうし、世界の農業の歴史のなかでも、これほど短期間に大きな変動のあらわれた例をわれわれは知らない。

だが、そういう大きな変化にもかかわらず、日本全体の変化があまりにいちじるしかったためか、この間、農業の立ちおくれということがしばしば論じられてきた。そして農業の大幅な構造改善が政策上も要請されるようになっていたのである。そのいみでは農業はなお変化したりないということであるらしい。

では、このような農業のはげしい変化をひきおこした原因はどこにあるのだろうか、農業や農村はその結果どう変わったのだろうか、それでもなお立ちおくれがみられるとすれば、それはなぜそうなるのだろうか。さらに、こういう変化は、けっして円滑に、順調にはこんでいるわけではなく、さまざまな問題を生みだしているのだが、それはいったいどんな性質のものなのだろうか、そして農村の将来はどういうことになるのだろうか。それらの主な点については、以下の諸章がいろいろな角度から答えることになる。ここでは、とりあえずこういう変化の結果、日本全体のなかで農村および農業の占める地位がどう変わったか、またこれを他の代表的な国とくらべたばあい、どこに特色があるのか、それについて主要な点を検討しておくことにしよう。

第2図 就業人口の構成



## 2 人口と生産

まず手はじめに就業人口の動きをみると第2図のごとくである。これは一五歳以上の就業人口の動きであるが、これでわかるように農林業人口(その大部分は農林業人口である)は三十年の一、六〇四万人から四十三年の九三四人まで、六七〇万人減じている。一年平均にすれば約五〇万人であり、これだけ農業は働き手を失ったことになる。もちろんこれは、いままでも農業で働いていた人が年々五〇万人ずつ出たということではない。農業で働いていた人が隠居したり死んだりしても、あとを若いひとたちが補充しない

ために、農業就業者が減るといふことのほうが、農業人口の減少にはずっと強く作用している(第一篇第一章をみよ)。ともかくこうした人口減少の結果、三十年には就業人口の三九%をしめていた農林業人口が、四十三年には一九%になってしまった。これは、いままでもなく工業をはじめほかの産業部門の就業者がいちじるしくふえたせいでもある。こんにちでも農業はひとつの産業部門としてはそうとう大きな人口をもっているが、国民の働き口としてのその比重は、かつてないほどに小さくなった

わけである。

\* この年々五〇万人の就業人口の減少というのは、いうまでもなく農家からの人口の流出量をしめすわけではない。農家からは、農家のあととりでない次三男や娘が年々流出してゆくから、農家人口の流出量はもつとずつと多くなる。たとえば四十三年でいうと、就職のための流出者は七九万人（出稼ぎをのぞく。他方に帰村者が二万人あるから、純流出は五八万人）であり、ほかに出稼ぎが二四万人となっている。

この点は男子だけについてみるともつといちじるしい。三十年には農林業の男子就業者は七八一万人で、男子の総就業者の三二・四%であったが、四十三年には四三八万人で一四・五%となっている。逆にいえば、農業生産はだんだん女子にまかされ、男子は農業外に働きにでてしまっているということであって、男のいない農村になりつつあるわけである。

このばあい、とくに注意しておいてよいことは、ここでは、右にみたように農業人口の絶対数がそうとう早い勢いで減っているということである。他の産業の人口がふえたために農業人口の割合が小さくなるということならば、明治以来ほぼ一貫してみられた現象であった（ただし太平洋戦争直後の数年間は例外）。しかし、農業人口の絶対数は、明治初年以來日華事変のころまで、日本ではほぼ一、四〇〇万人でいどで、たいしてふえも減りもしなかった。たとえば明治八年が一、四七五万人（農林業人口、以下同じ）、大正九年が一、四二九万人、昭和五年が一、四一三万人であって、減ったとしてもごくわずかである。そのいみで、このように絶対数が年々大幅に減るといふ現象は、日華事変後昭和十八年にいたるまでの数年間——とい

つてもこの間には十二年の一、三九六万人が十八年の一、三五三万人へと四三万人減じたにすぎない——を別とすれば、かつてなかったことである。それでも、最近の農村のうけた影響がいかに大きかったかは想像がつくであらう。

こうした人口流出と、非農業部門の膨張の結果、農業人口の対就業人口比率は上述のように一九％となった。いまこれをほかの国とくらべてみると、イギリス（一九六一年）三・八％、アメリカ（一九六六年）五・五％、ソ連（一九五九年）三五・二％、西ドイツ（一九六六年）一〇・二％、フランス（一九六二年）一九・八％、イタリア（一九六六年）二四・〇％、デンマーク（一九六〇年）一七・五％等である（これらの数字は水産業人口をふくんでいるので多少正確ではない。日本は同じ計算をすると六八年で一九・七％となる）。日本はなお英・米・独よりは多少とも農業人口の比重が高いが、すでにフランス・デンマークなみになっており、イタリアよりは低い水準にある。

一般に農業人口の比率は、その国の工業化のていどを、したがってまたその国の「近代化<sup>\*</sup>」のていどを大ざっぱではあるがしめすものと考えられる。そのいみでは日本の工業化は英・米・独にくらべればやや低いとしても、すでに西欧なみの水準にたっているといつてよい。しかもいまからわずか十五年まえに、なお農業人口が四割をこえ、林・水産業をくわえるとほとんど五〇％に近い就業人口を擁していた状態とくらべると、この間、日本経済の工業化の速度がいかに早かったかがわかるであらう。それだけ日本の社会が近代化したといつてもよいのである。